

真鍋博の未来都市観に関する研究
—都市居住の新たなビジョン構築に向けて—

代表 竹内 孝治（愛知産業大学造形学部建築学科 講師）

〔研究報告要旨〕

本研究は、数多くの未来画を描いたことで知られるイラストレーター・真鍋博(1932-2000)の未来都市観を明らかにすることを目的としたものである。高度成長期に展開された真鍋の創作活動を建築界との関連性も踏まえ整理した上で、真鍋による未来に関するエッセイやイラストレーションを読解することで、彼の未来都市への発言内容と描かれた未来都市像の特質を把握した。

真鍋博はいわば「バラ色の未来都市」のステレオタイプを創出した人物として知られる。当初は油彩画や漫画による風刺と人間性探究に軸足を置いていたが、高度成長を背景とした未来ブームに歩調をあわせて作風が変化し、「未来画」として括られるイラストレーションを生み出した。それと並行して未来を主題とするエッセイも数多く発表していった。こうした創作活動は、大阪万博前後に活発化したアートの領域横断的な協働や、各種専門家・研究者らとの交流のなかで展開され、特に未来学会やメタボリズム・グループの周辺において真鍋の活動が確認できる。しかし、必ずしもそれら思想・グループへは包摂しきれない志向性が真鍋の発言・作品には看取される。

真鍋の未来画は、一見したところ明るい色彩で華やかに描かれていることから、科学至上主義や都市文明礼讃を象徴したものとして捉えられがちである。しかし、彼の未来都市観を読解することでみえてくるのは、ダジャレや語呂合わせ、アナロジーを多用した常識にとらわれない発想法であり、ローカリティやマイノリティの尊重、地球環境全体を視野に収めた都市的空間像、住まう人間への温かな眼差しである。また、風刺画家という出自が真鍋の未来都市観に独特な個性を与えている。つまりは、望ましい未来を描くことは主眼ではなく、未来画を見る人々が、各々の未来をつくっていかうとする気づきの育みを企図したものと評価しうる。こうした真鍋の視点は、モダニズムの論理はもとより、未来学の思想やメタボリズムの都市像においては看過されてきたものであり、これからの都市居住を考えていくための新たな視点として期待できる。